

	牧師 山本護	司式 平尾文子	奏楽 山本恵美
前 奏	黙想		祈 禱
頌 栄	539 あめつちこぞりて		讃 美 歌 403 かみによりて
祈 禱			献 金
信仰告白	使徒信条 566		讃 詠 547 いまささぐるそなえものを
聖 書	ヨエル書 2:12~13 フィリピの信徒への手紙 2:1~2		主の祈り 564 讃 詠 546 聖なるかな
讃 美 歌	324 主イエスはすくいを		祝 禱
説 教	『教会のよろこび』 長崎 哲夫 牧師		後 奏

前回、パウロは第2回伝道旅行中キリストの「聖霊」に導かれ、北エーゲ海の港町トロアスからサモトラケ経由で北ギリシャの植民都市フィリピ迄行った(行16:14)と言った。これは、キリストの福音が初のヨーロッパ入りであり、エルサレム教会のヨハネマルコの母マリアが大きく働いたことと同様、有力者紫布の女性商人リディアの強信仰の意志が働いて、彼女の家は教会に変貌する結果を産んだ。それはリディア一人だけでなく、フィリピ書に片鱗を見せるエボディアやシンティケ(4:2)等福音の為命を張った女性たちの働きを見逃せない。

更に、フィリピ書がパウロの「獄中とか喜びの書簡」と言われるわけは(1:3)、「わたしの兄弟、協力者、戦友、フィリピ教会の使者、わたしの窮乏の時の奉仕者であったエパフロディト」(2:25)の様な者もいて、彼は多分エフェソで収監されていたパウロに仕えて、瀕死の重病を患ったことが母教会に知られたことを彼自身もパウロも心苦しく、彼を早急に送り返すとパウロは言った。この部分は行伝との関係もあり、推測ではあるが書簡は、50年前後新約ではテサロニケ書に次ぎいち早い執筆のもので、パウロはエフェソでの収監中、フィリピに帰還する彼に託したものらしい。そうであればパウロも教会も彼らの信仰は「命懸けの厚い交わり」にあって、フィリピ教会は彼に再会できることを深く喜び、パウロ自身も様々な心配がどれ程和らぐか分からぬと言った。だから教会は、主に結ばれている者として帰還する彼を大いに歓迎し、敬ってもらいたい。何故なら彼の奉仕は、教会のできない分を果たそうとしてキリストの業に命がけで、死ぬほどの目に会いながらの奉仕だったと(2:20)。

この言葉の迫真に、読者は「殉教」への覚悟にも迫られたかも知れぬ。更に、フィリピ教会はパウロを気遣い、どんなにか深い心遣いをしたか分からない(4:15)。彼らは言葉だけではなかった。困難を究めた宣教の窮乏時に物の遣り取りをもって彼の働きに参与した厚い思い遣りと、パウロ自身、彼らの具体的な愛の交流を忘れるわけにはいかぬと強調する。

パウロは、福音伝道者として貧しさにも豊かさにも、逆境にも順境にも置かれたところで感謝して生きることが出来ると自信をもって言った。物欲しさで言ったのでは無いが、諸教会の内、物の遣り取りをもって宣教の苦闘に参与したのは、フィリピ教会の兄弟姉妹ではなかったか(4:19)。教会は、パウロの窮乏を知り、見て見ぬふりをせず一度足らず何度も重ねて具体的な救いの贈り物を、エパフロディトを通して送った。パウロはそれらを、「芳しい香り、神が喜んで受けてくださる生贄・犠牲」と言って尊んだ(2:18)。

信仰は、精神的なものの満足だけでは説明出来ない。「主の教会」はただ心を満足させる所ではない。神の人たちは、自らとこの世との具体的な福音の闘いから得られる人と人との熱き係りによって構築される共同体だからだ。フィリピ書には、「あなたがたには、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられている」(1:29)と特筆される。この教会人の顔は靈性に満ち、靈的な喜びが豊かに充満する聖さがあつた。(長崎哲夫牧師の説教要約)

本日の礼拝は、長崎哲夫牧師に説教していただきます。3/19 会員である土屋周三兄(99歳)が召され、3/22 八王子のロゴス教会で山本牧師が葬儀を執り行い、翌日火葬しました。3/28(月)10:00~11:30、甲府での聖書研究会(YMCA)。教会総会は4/24 礼拝後に行ないます。会員は予定しておいて下さい。

礼拝堂・集会所の住所：408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3

連絡・問い合わせは牧師へ：408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324 TEL 0551-25-4008

メール komechan.olive@orange.zero.jp HPは「日本基督教団八ヶ岳教会」で検索して下さい。